《入選》

差別をなくすために

彦根中学校　３年
細川（ほそかわ）　渚（なぎさ）　さん

十一月下旬になり、人権週間をむかえた。今年は、以前にも学習したことがある部落差別について改めて考えた。ＶＴＲを見たり、講師の方を招いたりと、様々な方法で勉強した。

部落差別とは、昔の身分や住む地域などで差別されることだ。中学二年生のとき、部落差別という言葉をはじめて聞いたが、どのようなものなのかは分からなかった。しかし、中学三年生になり、自分の住んでいる地域の近くに「部落」と呼ばれる地域があると知った。それからは、「部落」という言葉が頭に残った。そこで、また部落について人権学習で勉強すると聞き、もう一度部落について学習し直そうと思った。部落についてのことや、実際に体験した人たちのＶＴＲを見てみて、出身地域だけで差別され、結婚まで反対されることは、とてもいやだし、ショックだったと思う。しかし、学習を通して疑問に思うことがあった。講師の方が来てくださると聞いたときも、「本当にこんな学習をすべきなのか」と正直思ってしまった。部落について学習することをやめれば、自分たちは部落という言葉を知らないまま大人になっていき、しだいに差別もなくなっていくと思ったからだ。差別が嫌なら部落について伝えるべきではないのではと思いながらも講演の日をむかえた。話を聞く準備を終えると講師の方がお見えになった。その方たちは夫婦で、女性の方が実際に部落出身の方だった。女性の方が長年にわたって体験した差別について、男性のように、身近に部落出身の人がいるという状況によってした体験やそのときの心情について話された。それを聞いて、自分の思いや考えは全て変わった。女性の方がお見えになる前、心の中で、「女性は他の人と比べ、見た目はどうなのか」と思ってしまった自分がいた。実際に差別しているわけでなくても、心の奥底で差別してしまっていたことに気付いた。そして、たとえ部落差別がなくなっても、他にも差別がたくさん残ってしまうということも分かった。

このように、部落などについて勉強するのはただ部落差別をなくすためだけでなく、他の差別もなくしていくために勉強するのだと思った。実際に差別を体験したからこその思いや考え、つらさをみんなで理解し合っていくことが大切だと思った。